

酪農大の白樺並木更新

33年までに伐採、植樹

【江別】酪農学園大は、国道12号から本館に続く大学敷地内の「白樺並木」を更新する事業に着手した。樹齢が長くなっているため、創立100年となる2033年を目標に130本を順次伐採し、新しい木を植える計画だ。25日は第1弾として5本を切った。7月には、在学生や卒業生らが幼木を植える予定。

老木多く腐食や亀裂

同大によると、白樺並木は1953年ごろ、当時の短大生や教員らが敷地内の景観を向上させようと、幼木166本を植えたのが始まり。現在は約270本ある直線道路の並木に計138本が立っている。散歩やランニングを楽しむ学生や住民のロケ地として使われることもある。

シラカバの樹齢は80年程度とされる。並木は内部が腐食していたり、表面に亀裂が入ったりしており、安全のため、大半は遅くとも5年以内の伐採が必要な状態にある。

過去の強風で倒れ、木々の間の隙間が目立つ場所もある。

25日の伐採には、大学生や教職員、同じ学校法人が運営するとの森三

愛高の3年生ら計40人ほどが参加。石狩市森林組合の職員6人がチェンソーで、特に老朽化が著しい木を伐採し、学生らはのこぎりで枝払いなどを行った。

同大は伐採した木を加工して、ベンチやテーブル、コースターなどとして活用するなどの案を検討している。また、7月に卒業生が集う催しに合わせて、幼木15本を植える計画。26年以降も10、15本の伐採と植樹を繰り返す。



白樺の木を切る酪農学園大生（右から2人目）ら

返し、最終的には160本ほどの並木とする。

このほか、牛などの堆肥の有効活用やシラカバの成長を促すため、土づくりについても同大の教員や大学生、同高の生徒

が研究や実践を行う。

同大4年の三木ひなたさんは「白樺並木は愛着がある場所。自分たちが携わった並木が将来、どう成長するか楽しみ」と話した。